



# ありあけ

佐賀大学農学部  
同窓会報

No.25

発行日 2020年1月1日  
編集 会報編集委員会

発行 佐賀大学農学部同窓会  
住所 佐賀市本庄町1 佐賀大学内

TEL 0952-23-1253 FAX 0952-25-5700  
E-mail dousoukai@sadai.jp  
ホームページ http://sadai.jp/alumni/nougakudousoukai/

## 巻頭言



## 協同組合論を学んで ～研究室での思い出～

日本協同組合連携機構代表理事専務 馬場利彦  
(S58年院修了 農経)

私は、佐賀大学農学部農学科に昭和52年に入学し、3年生から当時の伊東勇夫教授・陣内義人助教授の農業経済学教室に正式に所属、56年卒業と同時に大学院に進み、58年3月農学研究科修了後、全国農業協同組合中央会（JA全中）に入会しました。全中に36年間所属し、最後の8年間参事を務め、定年退職した後、令和元年6月から日本協同組合連携機構（JCA）の代表理事専務に就任いたしました。

こう見ると協同組合一筋とも言えなくもありませんが、以下、学生時代を振り返りつつ佐賀大学農学部に入ってよかったと今も実感しているいくつかの出来事をご紹介します。

### 佐賀大学に農業経済学教室があったこと

私の生まれは、福岡県糸島市（当時は糸島郡前原町）で、親はミカンと米の専業農家でした。ミカンのおかげで家も小学5年生の頃に古びた百姓家から建て替えできましたが、中学に入る頃にはミカンは安値つきで、両親ともに土方日雇の毎日でした。

学校へ提出する書類に親の職業欄があって、父に「土方と書くの？」と尋ねたら、「百姓、いや農業と書け」と言った怒った顔は今でも忘れられません。「なぜ農業だけでメシが食えないのか」との思いが、その後の私にとっての問題意識・原点ともいえ、佐賀大学農学部農業経済学教室の機関誌「農経会報」デビューの時もそのことを書いた覚えがあります。

糸島高校卒業後の進路を相談するときも、父は「医者になれ」としか言わず、とりあえず理系コースを選択していましたが、医者になる頭もなくひそかに

農学部しかも農業経済学のあるところと決めていました。佐大に合格して、父親には「いずれ佐賀医科大学もできるし、編入できるかも」とか言って、佐大に行くことを承諾させた記憶があります。

### 農経教室と「滝沢」が私の居場所



筆者、2列目左

佐大では1年目から、伊東先生の尽力で集められた専門書に囲まれた部屋に入りびたり、コーヒーとたばこ好きの陣内先生のおかげで教室で休憩ができ、ソフトボール常勝軍団の一員にもなることができました。内海さんのご指導で、毎年先輩方を呼んでの旅行やソフトの試合、麻雀大会・飲み会など数々の催し事をやったことは覚えています。両先生の授業やゼミなどのことはすっかり忘れてしまいました。というのも親の仕送りに頼らず社会勉強と称して焼き鳥屋「滝沢」で夜から朝方までバイトして夜型人間になってしまい、朝からの授業とかほとんどさぼっていたのです。ただ、農村調査は大好きで、率

先して行っていたことは覚えています。その農村調査やヒアリングなどを通じ、「課題も解決策も現場にある」ということは、全中の農政・営農分野での仕事の仕方として活かしてきたつもりです。

### 全中の奨励研究報告を目標に

大学院に進むと、伊東先生から全国農業協同組合中央会の奨励研究に応募してみないかと言われ、陣内先生からも、寝坊して遅れた時に頭を叩かれ「焼き鳥屋もたいがいにして目標を持って大学院を過ごせ」と言われ、応募し奨励金をもらいました。その時はじめて全中の存在を認識することになったのです。

以降、陣内先生からは伊東先生の著書は勿論、梶井功先生はじめ主要な学者の著書やNIRAレポート等の論文の書評を書いてみる、三日月町等の集落代表者全部に転作団地化の合意形成のやり方を聞いてまとめろといった千本ノックを受けてきました。伊東先生からも『協同組合間協同論』の年表を作るようにといった宿題が出されましたが、こうした経験が全中での業務に本当に役立ち、両先生へは感謝しかありません。

### 全中に入会して、また今も伊東門下生として

大学院の時に日本協同組合学会が立ち上がり、伊東先生が初代会長となられて秋季大会を佐賀大学で実施したこともそうですが、全中に入って見て、多くの方々が伊東先生のことは知っていて、先生の偉大さを実感しました。



全中での仕事の中心は、米の転作拡大、食糧法廃止から民間流通への移行、農産物輸入自由化・WTO対策、さらにはTPPと農協改革というように、米・農産物貿易・農地をはじめ規制緩和という3つの自由化との闘いだったと思います。そして、これらを協同組合運動の力で、農協の農業振興計画・営農集団・集落営農づくり、農地利用調整を進めながら、現場に合わせた担い手経営所得安定対策・日本型直接支払いなどの制度へつなげていくことでした。

いま、日本協同組合連携機構（JCA）において、地域の抱える様々な課題に農林漁協・生協・労協・事業協同組合等などの協同組合が連携して課題解決していく運動・事業を研究・提起するという仕事についています。「課題解決のヒントは現場にある」という佐賀大学時代に培った信条をもとに、伊東先生の『協同組合間協同論』をバイブルにして、組合員・会員団体・地域の皆さまに少しでも役立つような仕事をしてまいりたいと思います。

## 在学生と大学教職員・卒業生の交流会

～就職や仕事、生活面まで幅広い質問にアドバイス～

7月24日、「佐賀大学農学部就職講座（企業によるパネルディスカッション）」（対象は農学部3年、同大学院1年の在学生）の後段に在学生・大学教職員・卒業生約40名が一堂に会する交流会を開催いたしました（本年度で6回目）。



小池会長の開会あいさつ

前段の就職講座は農学部大講義室において、一番食品(株)、久原本家グループ、山崎製パン(株)、やずや(株)、久光製薬(株)の5社から人事担当者として

社して数年の農学部OB・OGによる企業紹介などが行われました。

農学部同窓会では、かささぎホール（旧第二生協食堂）にサンドイッチや唐揚げなどの軽食（軽くアルコールもいれつつ）を用意し、在学生がもっとざくばらんに話せるような場づくりを行いました。

就職講座参加企業（山崎製パン(株)、やずや(株)）も含め、同窓会の先輩・後輩談義で賑わいながら交流を深めてもらう打ち解けた雰囲気とするため、佐賀県庁、佐賀市役所、学校教職員、JAグループ（今回はJAさが）といった県内の同窓会支部にご理解を賜り、後輩達のために若手職員や支部役員の方々

が1日の仕事を済ませたあとに駆けつけていただきました。

交流会は小池会長の主催者あいさつに引き続き小林農学部長のあいさつをいただいたのち、乾杯によりスタートしました。



小林学部長の乾杯

在學生は思い思いに企業・団体ごとのテーブルを回り、仕事や社会人としての生活など幅広い質問をし、先輩たちのアドバイスに熱心に耳を傾けていました。参加した在學生からは、「就職について不安な気持ちを聞いてもらえることがなかなかないので、今日はいいい機会だった。」といった感想もありました。

最後に、若手先輩を代表して佐賀県佐城農業改良



交流会の様子

普及センターに勤務されている古賀一生さん（H25年院修了 応生）から、激励の言葉として在學生の今後の就職活動に熱いエールを送って



水田副会長の閉会のことば

ただき、水田副会長の閉会のことばで締めを行いましたが、その後もなかなか話が尽きず、終了時間を延長するなどたいへん盛り上がりました。

今年度の在學生の参加者は17人と昨年の参加者31人より減少しましたが、大学から交流会が大変盛会だったとお礼の言葉をいただいたこと（前段の就職講座を取り仕切っていた担当者から、「ほかの大学では、このように手厚く充実した交流会はない」といった話があった）や交流会後に回収したアンケート結果では県内就職希望者が3割程度（去年はゼロ）になったことなど、交流会を企画運営した同窓会にとって喜びを感じた一日となりました。

なお、今回、お忙しい中にご参加いただいた農学部OB・OG、支部役員の皆様には、在學生に貴重な体験談やアドバイスを惜しむことなくお話しください、厚くお礼申し上げます。

同窓会では、今回、参加者からアンケート調査でいただいたご意見等を参考にしながら、今後の在學生支援に役立てたいと考えていますので、今後の同窓会員の皆様方のご支援、ご協力をよろしく願います。 瀬尾 裕一（S63年卒 農・育）

## 農学部と農学部同窓会との意見交換会

12月5日、農学部と農学部同窓会との意見交換会を菱の実会館において開催しました。農学部からは小林元太農学部長をはじめ永尾晃治副学部長、穴井豊昭副学部長、一色司郎副学部長、鈴木章弘生物科学コース長、田中宗浩食資源環境科学コース長、宗伸明生命機能科学コース長、山崎欽哉農学部事務長のご参加をいただき、同窓会からは小池良美会長、水田和彦副会長、石橋泰之副会長ほか佐賀県支部、佐賀県教職員支部、神埼支部、佐賀市役所支部、農業自営者の会の役員9名が出席いたしました。

意見交換会では、小池同窓会長から「限られた時間であるがこの場を大学と同窓会の情報の共有の場

にしたい」「地域の大学として母校が発展していくために同窓会のネットワークを生かして大学への協力・支援に取り組んでいきたい」と挨拶があり、小林農学部長は、学部改組後の農学部の新たな研究・教育の取り組みを紹介するとともに大学間の競争が激しくなる中で、「地域に根差した大学として持続的に前進していくために農学部の強みと特徴を徹底的に生かした研究・教育に取り組んでいく」



と述べられました。

続いて副学部長及び各コース長から学生の就職状況、改組後の学生教育の工夫、さらに研究評価や研究費確保、地域連携の強化など様々な点から貴重な意見をいただきました。学生の就職率については食品関係や製薬・化粧品関係、公務員などほぼ100%で非常に高いこと、逆に大学院進学者が少なくなっているとの悩み、また、新たな一括選抜入試方式に伴い、1年生に学部や各コースの魅力をいかに紹介し、理解を深めてもらうかに腐心されており、研究内容のわかりやすい紹介や研究室訪問など様々な創意工夫がなされていることが紹介されました。

研究面では、財政的な厳しさは年々増している状況にあるが、科研費及び論文数等では全学の中でも農学部が群を抜いており、2年前から動いている農水産圏プロジェクトやスマート農業、植物工場での取り組みなど地域の課題に対応した大きなプロジェクト研究が進んでいること、一方、科研費の偏在など格差もあり依然として財政面の制約も大きく、今後、地域・社会連携の強化についても協力をお願いしたいとの意見がありました。

同窓会からは、農学部の研究への関心が非常に高まっており、特に革新的な育種研究が農業のイノ



ベーションや農業者の営農意欲の向上につながることから今後とも新品种の作出に大きな期待があること、さ

らにこれまで大学に蓄積されている研究成果についても研究の出口を指し示しながら広くわかりやすく紹介していただきたいとの意見もありました。

また、新しい教育プログラムについても様々な分野で活躍している同窓生も多く、アグリ・キャリアデザイン等への講師派遣等について積極的に協力していきたい、また、教職員支部からは、農業高校からの進学者の入学後の成績の状況や佐賀県卒の検討などの要望が出されました。

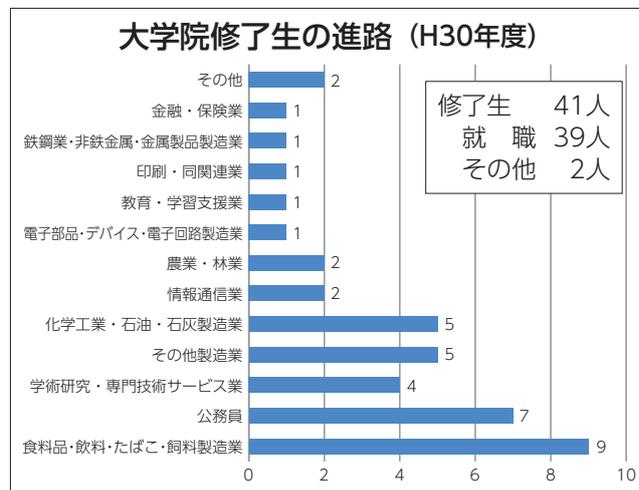
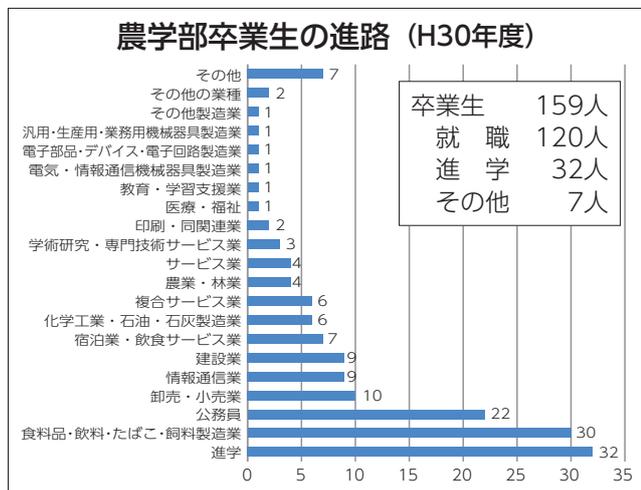
農協連支部からは今日、世界的に協同組合間連携が求められる中で、「協同組合論」を受講できる環境の整備を、熊本県庁支部からはスマート農業など先端的な研究内容や成果を同窓会報で情報発信してもらい参考になった、今後ともタイムリーな情報発信をお願いしたいとの意見が寄せられ、神埼支部からは中山間地域の厳しい現状に触れ、今後の集落・地域の将来の再編方向についてアイデアはないかとの意見が出されました。

その後、研究成果の情報発信の仕方や地域連携を実質化するための方策、農業高校からの入学者の単位取得状況、またアグリ・キャリアデザイン講義の中での協同組合のより実践的な実務家による講義など、時間を大幅に超過して熱心に意見交換を行うことができました。

今後とも同窓会員自ら農学部の研究教育について日頃から注目しながら、多様な意見交換を通して母校の一層の発展につながるよう同窓会活動を充実・強化していくこととしています。

内海 修一（S49年院修了 農経）

## 近年の農学部就職状況



資料：「佐賀大学農学部・大学院農学研究科 概要」(2019)

## 研究最前線

## 突然変異育種の新展開

植物遺伝育種学教授 穴井 豊昭



皆さんは突然変異と聞くと、どの様なものをイメージされますか？私は、子供の頃、核実験の放射線を浴びて発生した怪獣「ゴジラ」を連想していました。もちろん、この「ゴジラ」は架空の怪獣であり、いくら放射線を当ててもこの様な生物は出現しません。一方で、突然変異について正確に説明できるという人は意外と少ないのではないのでしょうか。このたび原稿執筆の機会をいただきましたので、我々の取り組んでいる突然変異育種研究の進展について少し紹介したいと思います。

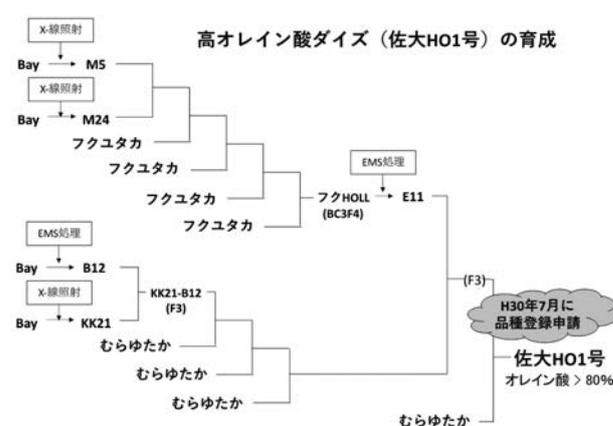
突然変異の育種への利用の歴史は古く、我が国では、1960年に設置された放射線育種場（現農業・食品産業技術総合研究機構次世代作物開発研究センター）が中心となって、イネやダイズをはじめとする様々な作物・果樹等の育種が進められてきました。しかしながら、従来の突然変異育種では、突然変異体集団の中から目的の形質を持つ個体を選抜し、その後、得られた突然変異体の形質や遺伝についての評価を行うというアプローチをとる必要があったため、膨大な労力と時間がかかる上に、本当に有用な突然変異体が得られるかどうかは、やってみないと分からず、実用的な品種育成には使いづらい技術でもありました。

我々の研究室では、前任者である高木胖名誉教授（S36年卒 農・育種）の頃から、突然変異を利用してダイズの油脂成分を改良する研究に取り組んできましたが、私が研究室を引き継いでからは、さらに効率的に新たな突然変異体を探し出すための技術開発に注力してきました。その成果の一つとして、高密度で突然変異が導入された約5万系統以上のダイズ突然変異体の種子と、それぞれの個体から抽出したDNAの組み合わせで構成される「ダイズ突然変異体ライブラリー」の開発に成功しました。この

ライブラリーとTILLING法というスクリーニング法を併用することで、表現形質からだけでなく、塩基配列情報に基づいて、特定の遺伝子に突然変異を生じた個体を迅速に単離することが可能になったのです。この方法の利用により、これまでダイズでは見つかっていなかった多数の有用遺伝子が単離出来るようになりました。

このシステムは、我々の研究室のみならず他大学や研究所でも広く利用されるようになり、我々がオリブオイルを超える80%以上のオレイン酸を蓄積するダイズ新品種「佐大HO1号（品種登録申請中）」を開発したほか、種々の脂肪酸やサポニン、イソフラボンといった種子中の機能性成分の合成経路をはじめ、開花時期の制御や新規のウイルス抵抗性機構に関与する遺伝子の解明にも活用され、今後の突然変異育種を画的に進歩させることが期待されています。

我々の成果の一部は、既にダイズ臭のしない人工肉などにも応用されつつありますので、皆さんが新しい形質を持つダイズ製品を見かけたときには、佐賀大学で開発された品種や突然変異体が利用されているかもしれないと、興味を持っていただければ幸いです。



## 穴井豊昭教授が日本育種学会賞を受賞

穴井教授の「ダイズ突然変異体リソースの整備と新規アレルの開発に関する研究」の業績が高く評価され、2019年度日本育種学会賞を受賞されました。新品種の育成も進んでおり、特に大豆の主産地である地元佐賀県農業の発展にも大きく寄与するものであり、今後、より生産性が高く栄養価の高いダイズの品種育成や機能性食品等の開発へ発展していくものと同窓会員一同、期待しています。

(編集担当 内海修一)

## 10年目を迎えた農業版MOT教育

農業・農村の未来を切り拓く人材育成を目的とした「農業版MOT教育」も令和元年度で10年を迎えました。これまで農学研究科の正規科目の受講や先進的農業経営者等のケーススタディー、実務経験者による特別講義、国内・海外研修、日韓合同シンポジウムやMOT修了生を交えた佐賀大マルシェの開催、修了研究論文の作成と発表等、多様な教育プログラムに取り組んできました。

この間、農業経営者を中心に食農関連産業・地域金融機関など異業種、また普及・研究・行政・JA営農指導担当者など社会人78名と大学院生36名が修了し、新商品の開発・販売や農産物の海外輸出の試み、農業経営の法人化による経営の革新、農福連携ビジネスの展開、さらに韓国農水産大学学生の1年間の留学実地研修や佐賀大学農学部生のインターシップ受け入れなど多彩な取り組みが進んでいます。

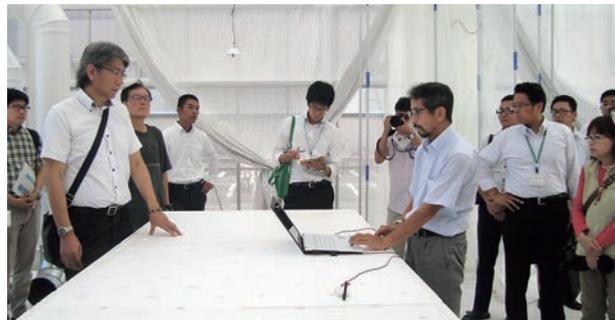
修了生の中から農林水産大臣賞や環境大臣賞など全国規模での受賞者も多く、また若手農業女性や全国農業青年会議における農業青年の大臣賞受賞、道の駅ソフトクリーム甲子園での上位入賞など地域をけん引するリーダーとしての活躍が光っています。

令和元年度のMOT特別講演会では、近年、注目されている「スマート農業」に焦点を当て、「農業のIoT活用とスマート農業の展望」をテーマに、佐賀大学農学部准教授の稲葉繁樹先生に「農業のIoT



稲葉准教授

活用に向けた研究動向」を、(株)オプティムゼネラルマネージャーの坂田泰章氏に「最新のテクノロジーが経営に与える巨大なインパクト」と題して講演をしていただきました。当日は会場いっぱいの100名を超える参加があり、スマート農業へ関心の高さが窺えました。また、講演会後には農学部の先端的研究施設である「植物工場」と「応用水圏生物実験室」



後藤教授

の研究状況と狙いなどを、それぞれ農学部教授の後藤文之先生と農学部講師の木村圭先生（現准教授）に詳細に説明していただきました。今後の新たな事業展開が大いに期待されます。

また、特別講演会に引き続きMOT修了生と大学



アグリ・マイスターの会

で組織する「佐賀大学農学部アグリ・マイスターの会」を佐賀市のグランデはがくれで開催し、40名が参加しました。役員改選により新会長に石橋健一氏（第6期生）、副会長に本山智子氏（第4回生）、古本尚士氏（第6回生）を選出し、修了生の情報交換のネットワークの強化に加え、学生の教育の場としての機能をさらに強化していく新たな方針の基に活動を展開していくことが確認されました。

内海 修一（S49年院修了 農経）



第5回佐賀大マルシェ（R1.12.7）

## 松尾文則さん、全国町村議会議長会会長に就任



農学部同窓会員である松尾文則さんが令和元年7月に第35代全国町村議会議長会会長に選出されました。

松尾さんは、昭和59年に佐賀大学農学部農学科（農業経営経済学）を卒業され、その後、(株)西有田土木に入社され、代表取締役として自社の経営発展に頑張っておられました。平成15年に合併前の西有田町議会議員を1期務め、現在、有田町議会議員として4期目、平成24年から町議会議長、平成27年から佐賀県町村議会議長会会長に就任されています。

全国町村議会議長会会長就任後、まもなく内閣総理大臣の諮問機関である地方制度調査会への出席や第63回町村議会議長全国大会の開催など超多忙な日々が続いています。全国の町村議会一体となった東日本大震災からの復興など予算編成対策への要望活動や議会の機能強化及び議員のなり手不足を克服するための多様な人材確保など、現場の声に根差した精力的な活動が続いています。

学生時代から鍛えたスポーツマンシップとバイタリティー、温厚な人柄と豊富な経験を生かし全国の町村の元気アップのために大いに活躍されることを同窓会員一同、期待しています。

内海 修一（S49年院修了 農経）

## 会員のお場

### 「成富兵庫茂安～智の継承と創新～」

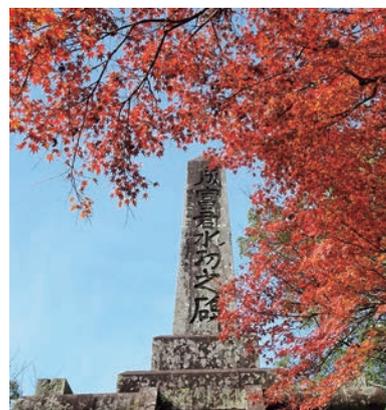
平成24年3月、37年間務めた佐賀県庁、農山漁村課を最後に退職しました。水関係行政にいろいろと携わってきたことから、嘉瀬川防災施設「さが水ものがたり館」（<http://www.sagamizu.jp/>）を手伝ってほしいというお声をいただき、施設を管理する国土交通省及び佐賀市から委託業務を行う特定非営利活動法人嘉瀬川交流軸に身を置くことになりました。

今からおよそ400年前、鍋島藩創成期の武将・成富兵庫茂安（1559～1634）は、嘉瀬川の水を佐賀城下へ導くための取り入れ口となる石井樋をはじめ、大井手堰、天狗の鼻、象の鼻、乗越堤、水害防備竹林、遊水地など、治水と利水を一体にした、巧みな技で制御する石井樋施設群を、佐賀平野が展開していく扇の要、大和町尼寺の地に建設しました。

以来、石井樋施設群は、度重なる洪水による損壊と修復を繰り返しつつ、昭和30年代の災害で損壊し、上流に出来た川上頭首工に機能を移したこともあって荒廃していましたが、水運史など水への造詣が深い、今上天皇のご成婚記念としての歴史的治水整備事業で、平成6年から平成17年にかけて復元・完成しています。

### 服部 二郎（S50年卒 農土・土改）

公園の中島には「成富君水功之碑」（題字；副島種臣、撰文；久米邦武）が明治24年に建立されており、兵庫さんの遺徳を永く伝える1400余字の漢文が石碑三面びっしりと刻まれています。



藩内あまねく干ばつと洪水を治め、豊かに成り富む国の基を築いた様子は、江戸初期ケンペル（1651～1716）が、「肥沃な平野で河川が貫流し、諸所に水門があり、どの田にも水を補給しうるようになっており、肥前の稲田は、加賀と並び、全日本を通じて最も豊穡な米穀の産地である」と江戸参府旅行日記（1691.2.15）で感服しています。

兵庫さんが成し遂げた水利統制は、今なお命脈を保ち息づいており、その基本構造の上に、その時代出来なかった「北山ダム・川上頭首工・筑後大堰・

嘉瀬川ダム」など、広域的な水利施設が近現代に整ってきています。

近年は、激しい豪雨をはじめ自然災害が毎年各所を襲っており、防災・減災、人命を守る備えは重要な課題となっています。兵庫さんは、自然を克服とか想定外だったとか言うのではなく、自然を怒らせない・順応できる多重防御や脅威の分散・自己回復力を持った施設群を、地域特性に合わせて造って

ます。

ダムや堤防だけでは洪水を防げないことに気付かされた今、兵庫さんに倣い、山地ダム、山麓ため池、平地クリークと田んぼというダム、有明海も巨大ダムに見立て、総て一元的・賢明に操作管理していくことで、様々なリスクの回避、良質な農林水産業、佐賀さいこうの地へと、成り富むのではないのでしょうか。

## 若手OB・OGからのメッセージ

### なにごとにも経験あるのみ！

JAさが本所園芸部園芸振興課 **渡邊 真子**  
(H28年卒 生環・地盤)

私は佐賀大学農学部を卒業して4年が経ちます。大学時代に研究の一環で米を栽培し、一連の農作業を経験したことで、こんなにも苦勞されて米や野菜を生産されている農家さんのためになる仕事がしたいと思い、JAさがに就職しました。

入組前から『営農指導』という農家さんに栽培技術を指導する部署を強く希望しており、入組4年目の現在まで営農指導員として働いています。最初はやる気に満ち溢れていましたが、プロの農家さんに私が指導できることなど1つもなく、むしろ教えてもらう側で、自分の知識のなさを何度も実感させられました。米に関しては少し栽培経験がありましたが、野菜の栽培は全く分からず、毎日が勉強でした。土壌物理や作物の生理生態など基礎知識は大学で学んだはずが、うる覚えでもっと勉強しておけばよかったと思うことが大学時代への唯一の後悔です。

私は現在、アスパラガスと小ねぎの指導業務をしています。農家さんの所得の向上を目標に、指導業務のほかに①定期的に会議を開催し、栽培技術の検討 ②県外産地、消費地との情報交換 ③研修会等

の計画、開催等を行っています。私は農家さんのために何ができるのか悩むことはたくさんありますが、知識や経験を増やし佐賀の農家さんのために仕事に励みたいと思います。

最後に学生のみなさんにお伝えしたい

ことは、大学生のうちにたくさんの経験を積んでください。私は大学1年の時に研修でドイツに行き、内気だった性格が社交的になったと思います。その他にもボランティア活動やバイト等たくさんの人と関わる機会を持つようにしていました。その経験のおかげで、社会人になり初対面の方と会話をする機会がたくさんありますが、人見知りになることなく、自ら進んで会話をできています。学生は勉強やバイトに忙しいかと思いますが、社会人に比べたら時間はたくさんあります。なので、みなさんも今のうちにたくさんの経験を積み、充実した楽しい大学生活を過ごしてください。



### 「これまでの経験を後輩たちに」

佐賀県立佐賀農業高等学校  
**川内 怜**  
(H24年卒 生機・栄養)

私は県内の農業高校から佐賀大学農学部生命機能科学科を経て、教員となり8年目となりました。

私は中学時代、人前に入るのも勉強も、どちらかというと苦手でした。しかし、高校時代には周囲の先生方の支えもあって、学校生活の中で様々なことに挑戦したり研究活動をしたりするうちに学ぶことの楽しさを知り、この経験を後輩たちに伝えたいと考えたことが、教員になるきっかけでした。大学では、先生方や友人にも恵まれ、高校の農業と理科免

許を取得することができました。

卒業後は唐津特別支援学校で講師として4年間勤務させていただきました。農業の免許は持っていますが、栽培は専門外で、日々悪戦苦闘しながら生徒と共に汗を流したことは良い経験となっています。また、教育の原点と言われる特別支援学校で、生徒と共に土に触れ、生徒たちが主体的に活動できる場を整える中で、「できた!」「もっとやりたい!」と植物の成長を見ると同時に、生徒たちの成長する姿を目の当たりにし、教育の素晴らしさと農業という生きた教材を使う面白さを実感しました。

現在、母校である佐賀農業高等学校で勤務し、4年目となりました。本校は生産系、食品系、環境系の農業教育に取り組んでおり、私は食品系を担当しています。食品系では、食品に関する基礎知識を高めるだけでなく、高校生ケーキカフェ「サノ・ボヌール」や生産物直売所「サノン・マルシェ」の運営を生徒主体で行うなど、地域に根差した学習を行っています。仕事をする中で、大学時代に学んだ、食品栄養化学や食品成分による疾病発症の予防と改善に関する研究が、現在における物事の考え方や教科指導に役立っています。また、大学時代を思い出すと、

生化学や物理化学などの専門教科に苦戦したことを思い出します。

しかし、何がわからなかったのか

を知っているからこそ、生徒の目線に立ち、個々の躰きに目を向けることができています。

農業高校には、私と同じように勉強に躰いたり、自分に自信が持てず、下を向いたりする生徒がたくさんいます。私の経験を伝えることで、自己肯定感を高め、夢を持つことができる生徒が一人でも多く育ってくれることを願い、日々精進しています。

最後に、在学生の皆さん。教員という仕事は、計画通りに事が運ばないことは多々あります。しかしそれ以上に、生徒の人生に大きく関わることのできる出会いや出来事があり、やりがい溢れる仕事です。私のように教育現場で働いてみたいと思う人が増えることを願っています。



## 積極的なチャレンジを!

佐賀市役所農業振興課 金子祥太郎

(H29年院修了 植遺)

私は平成29年3月に佐賀大学大学院農学研究科を修了後、佐賀市役所に入庁し、現在は農業振興課に勤務しています。農業振興課では、農地の貸し借りや農業資金に関する事務、将来的に地域・集落の農業をどのように守っていくかの説明などを行っています。

農業は、人手不足により管理できる農地が減少し、耕作放棄地が増加しているのが現状です。そのような状況にならないために、もしくは、そのような状況を打破するために、将来的にどのように農業を守っていくのか、地域・集落に対して説明を行っています。

農家さんのお話で特に多いのは、「息子はいるが将来農業をしてくれるかはわからない」、「今耕作している規模で限界」といった意見です。そのような状況でどのように話を進めて、どこを落としどころにするか、その判断がとても難しいです。話し合

いに行く地域や集落ごとに課題は異なり、農家さんによって感じ方も違うので、同じように話をしても、話し合い後の雰囲気は地域・集落によって様々です。

私は、もともと人前で話すのはあまり得意な方ではないので、話し合い後には「こう言えば良かった」、「この話をすれば良かった」などと反省することが多いです。しかし、このような経験はいずれ自分の糧になると信じています。上手くいかない経験というのは、今はきつく感じますが、そこから学ぶことがたくさんあるので、積極的にいろいろなことに取り組み、成功・失敗問わずたくさんの経験を積むことを大切にしていきたいと思っています。

私は大学院で、アスパラガスの連作障害の原因究明とその解決方法について研究をしていました。現在の職場では、大学院時代に蓄えたアスパラガスの連作障害の知識が活躍した



ことはほとんどないですが、実験の段取りや実験結果の分析などをするとときに培われた考える力はとても役に立っています。市役所の業務は多分野にわたるので、そういった考え方や取り組み方が生かされる機会は今後も大いにあると思います。

大学の研究で得た知識を生かそうとすると、その専門分野の職種に就かなければ、生かす場面はあまり無いかもしれませんが、ものの捉え方や思考の引

き出しを多く持つことで、これから先、どのような分野、場面に遭遇しても対応することができると思います。

最後に後輩たちへのメッセージとして、大学生活はとても多くの時間がありますが、あっという間に過ぎていきます。様々なことに取り組む中で、一つでも多くのことを経験して、吸収して、自分の糧にして欲しいと思います。

## 〔留学生の広場〕

## 農学研究科で学ぶ留学生、<sup>ちんかむ</sup>陳柯夢さん

### ～佐賀での研究と生活～



私は中国の浙江省の出身です。現在、佐賀大学農学研究科1年で地域社会開発学コースで学んでいます。佐賀大学に来る前は日本語を専攻していました。私は大学の時からずっと日本の農村開発に興味を持っていました。中国の大学を卒業したら、日本の農村社会についてもっと勉強しながら、研究をしたいと考えて、佐賀大学農学研究科に入りました。

修士論文は「村落自治」という大きなテーマから絞ろうと現在、検討を続けています。また、社会人の皆さんと一緒に学ぶ農業版MOTコースも専攻しており、そこでは、中国のグリーンツーリズムが今抱えている問題について研究したいと思っています。

以前、佐賀大学で1年間交換留学生として過ごしていました。佐賀大学が好きで、また戻りました。それに、すでに佐賀に慣れていたので勉強に専念しやすいと思います。佐賀大学の先生はみんな優しく、学生と友達みたいに付き合っています。これは中国では珍しいことです。

楽しいことや勉強になったこともいっぱいありました。特に夏の合宿が体験でき、楽しかったです。中国では合宿がないので、今回、唐津の小川島で合宿ができて、本当に楽しかったです。そして、この1年間、自分も自分の進歩を感じました。前書いた

研究計画書を振りかえって見たとき、この進歩がわかりました。

この1年間、一番勉強になったのは、一つの課題について、多方面から見て考える能力と自習力だと思います。まだまだ勉強する必要があることがいっぱいありますが、一つの課題について、どうやって研究していくのが少しずつ分かってきました。

佐賀はもともと暮らしやすいし、前も1年間ここで暮らしていましたので、生活面などで困ることはあまりありません。休みの日はアルバイトをしたり、宿題や研究の課題についての勉強をします。卒業したら、日本で就職したいと考えています。最近も就活の準備をしています。

もともと日本が好きで、大学の時も、自分で旅行に来たことが2回あります（関西と東京）。佐賀に来てからも、佐賀の周辺のいろいろなところに行きました（大分や熊本や福岡など）。

これからもしっかり勉強し充実した大学生活にしたいと考えています。



佐賀大マルシェでみかんの販売 (R1.12.7)

## 支部だより

### 佐賀県庁支部

10月23日にグラウンデはがくれ(佐賀市天神2丁目)において、令和元年度佐賀大学農学部同窓会佐賀県庁支部通常総会を開催しました。今年度は、望岡侑佳里、古賀雅貴、藤田将平、松隈公孝、川副菜々実、高田佳織、中島美咲、原 成美、東 哲典、平野優徳、松尾菜月、村上 愛【敬称略】の12名が新たに会員になり、現在の会員数は229名となりました。今回は台風15号の被害を鑑み一度延期を経ての開催となり、38名の参加でした。また佐賀大学農学部同窓会から小池良美会長、田中宗浩副会長(佐賀大学農学部 教授)のお二人にも駆けつけていただき、同窓会本会の様子や佐賀大学の情報を伝えていただきました。議事では、滞りなくすべての議案について、承認をいただきました。新しい支部長以下の役員については、次のとおりに選出されました。支部長：成澤義和(S58)、副支部長：石橋泰之(S60)、寺崎信行(S61)、幹事長：八田 聡(S63)、会計：荘山敦史(H8)、幹事：野口由美子(H4)、山口慎二(H22)、平田真紀子(H28院)、前田貢輝(H

25)、熊森 昇(H4)、井上賢二(H3) 監事：草場篤慶(H28)、東島聖(H30)【敬称略】〈( )は卒業年次〉総会後の懇親会では、農学部同窓会から差し入れていただいた佐賀大学のお酒「悠々知酔」で乾杯し、毎回恒例の「お楽しみ抽選会」を実施し、先輩・同輩・後輩と和気あいあいと懇談を楽しむことが出来ました。令和2年3月に開催される「先輩を送る会」には、多くの会員の皆様が参加していただけるように期待しています。

八田 聡(S63年卒 園・果)



### 熊本県庁佐賀大学農学部同窓会

令和元年、最初の熊本県庁佐賀大学農学部同窓会及び勇退者激励会を9月21日(土)熊本市アークホテルにおいて開催し、来賓、OBの先輩を含めて24名の出席がありました。

はじめに、緒方会長(S57年卒、園芸)の挨拶、来賓の佐賀大学農学部同窓会本部より、小池会長に大学及び同窓会の近況報告等の挨拶を頂きました。

議事では、昨年度事業実績、決算報告及び今年事業計画、予算案ともに全会一致で承認されました。

役員改選が行われ、新しい役員に三原会長(S58年卒、農学)、榮副会長(S60年卒、農学)、橋口監事(S60年卒、農学)が承認されました。続いて佐賀大学の近況報告では、同窓会本部の田中副会長から最近の大学の情勢等について説明がありました。

その後、勇退者激励会では、昨年、退職された金島先輩(農業技術課)、瀧上先輩(アグリシステム総研)、長田先輩(球磨農業普及・振興課)3名へ記念品を贈呈して、記念撮影後に、三原新会長の乾杯の音頭で、懇親会に移りました。



会員の皆さんは、昭和36年卒の大先輩から、平成30年卒の若手職員まで、世代を越えてそれぞれの近況や昔話などの話題で和やかな雰囲気の中で大いに盛り上がり、楽しいひと時を過ごすことができ、OBを代表して大田黒先輩(S50年卒、園芸)の一本締めで会を終了しました。

年を重ねるほどに、昔が懐かしくなりますが、現役職員とともに、OBの先輩の皆さんにも、これからもずっと元気で過ごしていただき、来年も同窓会への出席をお願いしたいと思います。

三原 順一(S58年卒 農・育)

## 佐賀県教職員支部

令和になり、最初の佐賀県教職員支部総会を会員24名の出席のもと12月14日（土）佐賀市で開催しました。まず、はじめに青木支部長より、会員の皆さんがそれぞれ農業系高校等の管理職や中核として学校の充実・発展にご尽力いただいていることに対して感謝の意を述べられました。そして、この3年間の農学部同窓会会費納入促進の協力に対するお礼の挨拶があり、引き続き来賓としてご臨席いただいた農学部同窓会の小池良美会長より、同窓会活動の近況や今後の総会への参加のお願い等のご挨拶をいただきました。特に、会費納入については、本日新たに終身会費4名を含む納入がありました。これで、農業系高校会員38名のうち終身会費納入者は23名となりました。議事では、会員の皆さんに農学部同窓会のことを理解していただくために、支部長から農学部同窓会総会の資料により、令和元年度の役員体制、事業内容、収支予算（一般会計、特別会計）のことについて概要の説明があり、また会計報告、令

和2・3年度の教職員支部役員とともに全会一致で承認されました。

総会終了後には懇親会を行い、小池会長にも引き続き出席をしていただき、農学部同窓会からいただいた「悠々知酔」により日本酒で乾杯からスタートし、先輩・後輩の会員間での楽しい交流の場となりました。来年もより多くの会員の参加を祈念いたします。 谷水 淳一（H4年卒 応・遺資）



## 作物学研究室同窓会

### ～令和最初の豊穰会～

新元号になって初めての豊穰会を令和元(2019年)年9月14日に開催しました。豊穰会のメンバーは、作物学研究室を昭和56年から58年に卒業した者(学部、大学院)を中心に20名ほど。初回を阿比留さん(S57卒)のお世話で平成9年2月に長崎の平戸で開催、その時「豊穰会」という名前も決めました。それ以降、佐賀・長崎、熊本、福岡の持ち回りで西暦の奇数年に開催しています。

豊穰会の名前は、私たちが作物学研究室に在籍していた時、農学部創立25周年を記念して当時の作物学研究室の前に「豊穰」の像が建立されたことに因んでいます。

今回は福岡県の当番、会場は成吉さん(S58卒)がオーナーの「古民家café華蔵」(筑紫野市)で、16名が出席しました。成吉さんは、会社を早期退職して一年前にcaféを始め、地域活動の力にもなりたいたいの思いから食事の提供だけでなくイベントなども開催しています。お店は食事もおいしく、お洒落でとてもいい雰囲気でした。

そして、筑後市でバンド活動もしている村上さん(S56卒)が、前回の豊穰会で予告されていたとおり、ギターを持込んでのミニコンサート、70年代フォークソングをみんなで熱唱。また、卒業後世界中を飛

び回り波乱万丈の人生を送りつつも、現在は経営者として活躍している佐藤さん(S58卒)も初めて参加、グローバルな話に盛りあがるなど楽しい時間を過ごすことができました。

大学卒業後の進路は、会社員や公務員、高校教員、団体職員、自営就農者など様々ですが、それぞれの道で40年近く頑張っています。既に還暦前後の年齢になり、再就職や定年新規就農、店のオーナー、もうすぐ退職、まだまだ経営者など、人生の大きな転換期を迎えています。年を重ねても毎回皆の頑張りに刺激を受け、力もらっています。令和3年(2021年)は、佐賀・長崎の当番で開催予定。2年後がまた楽しみです。 溝口 宜彦(S56年卒 農・作)



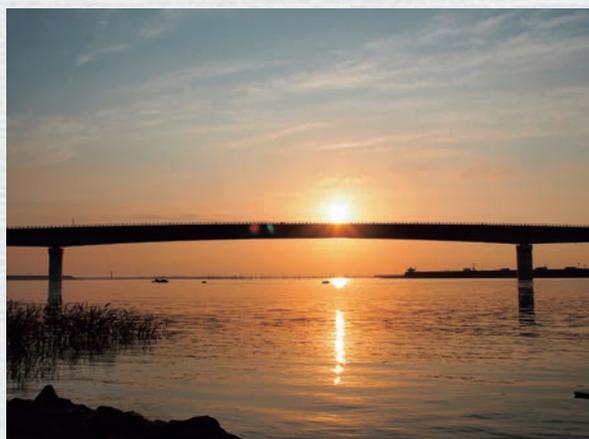
## 編集後記

●新年あけましておめでとうございます。今年も同窓会員の皆様にとって希望に満ちた1年となりますよう心からご祈念申し上げます。農学部同窓会報「ありあけNo.25」をお届けいたします。今回も、多くの会員の皆様からご寄稿をいただき誠にありがとうございました。

●昨年も自然災害の多い1年でしたが、佐賀県でも豪雨、台風等により農作物被害、施設被害、農地被害など約154億円の甚大な被害が発生しました。このような中、全国からの多くのボランティアの皆さんのご支援、ご協力をいただき復興への取組みが一步一步続いています。あらためて人と人との絆や地域コミュニティの大切さを痛感させられました。

●巻頭言では、全国日本協同組合連携機構の馬場利彦さんから、「課題も解決策も現場にある」という仕事の基本姿勢に加え、異種協同組合間協同による「持続可能な地域のよりよい暮らし、仕事づくり」へ向けた取り組みの大切さについて投稿していただきました。多様な連携の構築が絆をより強くし、社会的課題の解決につながるものだと思います。

●大学農学部でも、農水産業の技術革新につながる多様な研究プロジェクトが進展しています。今回、研究最前線として穴井豊昭教授に「突然変異



六角川河口に架かる沿岸道路・六角川大橋と日の出  
田中俊之氏撮影（S59年卒 農・農経）

育種の新展開」を投稿していただきましたが、先生は2019年度の日本育種学会賞を受賞されました。新品種への期待が大きい中で地域農業の発展に直接的につながる研究で、今後とも多様な新品種が作出されていくことを会員一同大いに期待しています。

●今後とも全国各地、各界でご活躍されている同窓会員の多くの皆様からホットな情報をご寄稿いただき、会報の充実に努めていきたいと思っておりますのでよろしく願いいたします。

編集担当：内海 修一（S49年院修了 農経）

## 協賛広告

この度の同窓会報発刊に際しまして、皆様より協賛広告をお寄せいただき誠にありがとうございました。厚く御礼申し上げますとともに、協賛各社の今後のご発展をお祈り申し上げます。

安全・安心な「佐賀の食」。  
協同の力で支える「佐賀の農業」。

JAグループ佐賀は、食と農を基軸とした協同組合として、  
皆さまの豊かな暮らしを支えています。



*Grain & Pet Care Communication*

# 株式会社 森光商店

〒841-8611 佐賀県鳥栖市藤木町字若桜9-7  
PHONE.0942-85-1125(代) FAX.0942-83-8868

ホームページ <http://www.morimitsu.co.jp>